

声のクィアネス

——揺らぐジェンダーと身体の規範——

本論文は、声と身体およびジェンダーが自然に結びつくものとみなされてきた前提を問い直し、その結びつきが社会的規範によって形成され、同時に揺らいでいることを「声のクィアネス」として検討する。私たちは日常的に声から話者の性別や身体像を推測しがちであるが、その判断は必然ではなく、歴史的・文化的に構築されてきた可能性がある。

本稿では、女性の声が公共空間でケアやもてなしと結びついて社会化された過程、声の高さや音楽表現に刻まれたジェンダー規範、さらに「声—身体—アイデンティティ」を一体視する観念を整理した。加えて大東文化大学の大学生 65 名へのアンケート調査を用い、初めて聴く歌声からジェンダーを判断する傾向が強い一方で、判断しにくい声に対して否定ではなく肯定的な反応が多いことを示した。さらに、性別越境パフォーマンス、声優の多重的身体性、長谷川白紙の「多受肉」の実践、ボーカロイドや生成 AI などの音声技術は、声と身体の固定的対応を攪乱し「これも声だ」という認識の更新を促す。

本論文は、声を、規範の再生産装置であると同時に、その枠組みを拡張する端緒として位置づけ、より多様な生の可能性をひらく視座を提示する。